



雷の音に由来するユニークな坂  
ゴロゴロ松の坂

小野信太郎さん -白沢町平出-

戦時中、坂を上り切った付近にあった大きな松に雷が落ち、ゴロゴロ鳴る雷の音にちなんで呼ばれるようになりました。松は用材として切られましたが、小野さんは昭和20年代頃まで、馬に荷物を載せて松の前を通り、畑へ通ったといひます。通学バスが通るまでは、小学生の通学路としても利用されていました。



僧をまつるお堂の仏像



会津へ続く街道  
安穩祈る僧まつる  
行人坂

小林喜市さん -利根町道具-

江戸末期、大間々町（現・みどり市）と福島県会津若松市をつなぐ旧街道にあたり、村にまん延する疫病などを祈禱するために旅僧が訪れたといわれていることから、行人坂と呼ばれるされています。僧は土に埋められ断食し、鈴を鳴らしてお経を読み続ける修行「土中入定」したと伝えられ、僧をまつるために近くにお堂を建てたといわれています。幼少期に坂や周辺で遊んだという小林さんは「広場でやぐらを建てて盆踊りを楽しんだ」と振り返ります。

今も語られる伝説の坂

古くから地域に伝わる説話が残る坂が点在し、今を生きる人の暮らしに溶け込んでいます。

古今集撰者の万葉の歌人、凡河内躬恒が三峰山に幽閉され、京より母・白菊御前が訪ねようとしたところ、坂の途中で息が切れて亡くなったという心打たれる母子の伝説を秘める坂です。村人たちが母の嘆きに心打たれて建てたのが追母薬師堂で、周辺には白菊が袖を捨てた「袖畑」も残り、秘話伝説が色濃く見られます。薬師如来は眼病平癒として今も信仰を集め、日頃から拝みに行く田村さんは「目の手術が無事に終わった」と感謝します。



古墳群周辺に残る夫婦の悲話  
牛(丑)坂 -奈良町-

奈良古墳群周辺にある坂で、昔、この地に住む鶺鴒部梁という姫が都に出陣した夫と離れ、悲しさのあまりに発知川に身を投げた伝説があります。村人たちは悲運な2人を「鶺鴒部様の坂」と呼び、略して宇司坂、転じて牛坂となったといひます。古墳群より坂が丑の方向にあるとの説もあります。



百人一首に詠む  
母の死悲しむ心の叫び  
精切坂



現在も地域で管理している追母薬師堂

田村玉代さん  
-石墨町-